

芥川龍之介「開化の殺人」完成原稿について

——揺れる探偵小説——

小谷 瑛輔

芥川龍之介「開化の殺人」完成原稿について、このたび機会に恵まれ、多田蔵人氏とともに翻刻を担当することとなった。原稿は、秀明大学で平成二十四年十一月三日から四日にかけて開催された「飛翔祭」の展示、「芥川龍之介展」において初めて公開されたものである。なお、原稿四十一枚中九枚については既に、「芥川龍之介展」において発行された図版『芥川龍之介展 初公開「鼻」などの完成原稿』（秀明大学、平成二十四年十一月三日）において、「鼻」「山嶋」「浅草公園」の完成原稿とともに影印が紹介されている。

原稿用紙は芥川が愛用した松屋製で、縦二五・〇cm、横一七・五cm、枠は縦二〇・〇cm、横一四・二cm、二〇文字一〇行のものである。松屋製の原稿用紙には様々な種類があることが『芥川龍之介自筆未定稿図譜¹⁾』で紹介されてい

るが、大正七年頃によく用いられていたものがこの完成原稿でも用いられている。

本原稿は、『中央公論』の編集者によるものと思われる割付の跡があり、後に述べる点を除けば初出本文とほぼ同一のものなので、完成原稿であると判断できる。推敲の跡が多く、作品の生成の過程がうかがえる、研究上きわめて重要なものでもある。特に、推敲に貼り紙が用いられている箇所については、原稿用紙の裏から透かせば見えるものもあり、今回は元の記述についても可能な限り翻刻した。

「開化の殺人」は『中央公論』の大正七年七月増刊「秘密と開放号」に発表され、その際、目次では「芸術的／＼（新探偵小説）」という欄に入れられていた。しかし、発表され

たものを読むだけでは、芥川が果たして探偵小説をどのようなものと捉えていたのか、本作をどのような意味の探偵小説として書こうとしていたのかは判然としない。殺人事件の経緯が明らかになるという点は探偵小説らしいと言えなくもないが、手記の書き手が殺人を犯したということは冒頭から告白されてしまうので、それとは別に推理すべき空白はどこに設定されたと見るべきなのか、あるいはそもそも空白を推理するという形式が探偵小説に必要な条件と考えられていたのかさえ、不分明であった。しかし、今回の完成原稿は、いくつかの互いに異なる探偵小説らしさが原稿生成の過程で生まれ、削除されていく様子を生々しく示すものである。どうやら芥川は、探偵小説というジャンルに一方で拘束され、他方でそこから大胆に距離を取ろうとしてもいたようなのである。そうした相反する力が様々な形でせめぎ合う状態が、「開化の殺人」執筆であった。

原稿の問題を検討する前に、まずこの作品の成立にまつわる事情を整理しておきたい。「開化の殺人」は、発表前も発表後も本文が変化し続けた作品であった。「一種の探偵小説じみた」⁽²⁾、「開化の殺人」というタイトルの作品は、実は大正六年十一月には執筆が試みられており、そのとき

は『新小説』へ掲載される予定であったらしい。しかし結局芥川は、『新小説』には大正七年一月号に「西郷隆盛」という別の作品を載せている。その後、『大阪毎日新聞』に掲載する作品について編集者に「題は「開化の殺人」としておいて下さい或は「踏絵」と云ふのになるかも知れません⁽³⁾」と書き送っており、再び発表の計画があったことが分かる。しかし、『大阪毎日新聞』に発表されるのは最終的には「地獄変」になり、「開化の殺人」の発表は再び先送りにされる。

それがついに発表されるのが『中央公論』になるわけだが、このとき、当初予定されていたイメージからずれたものが完成しつつあったようだ。友人の松岡譲に「中央公論に探偵小説を書く約束をしたのでいやいやへんなものを書いてゐる。どうも才能をプロステイテユウトするやうな気がして心細くつていけない。それに探偵小説のつもりで書いてゐても探偵小説でなくなりさうなのだ⁽⁴⁾」と書き送っているのである。「プロステイテユウト」というのは、才能を卑劣なことに供する、金銭の為に品位を落とすというほどの意味であるが、ここには、探偵小説という当時一段下のものとは別に見なされていたジャンルを見下し、自己の本領を確

認でできる。

しかし、探偵小説らしい探偵小説の執筆は断念されたわけではなく、実はその後も試みられている。『新小説』大正九年四月号に発表された「未定稿」というタイトルの未完の作品がそれである。また、「未定稿」の元になったと思われる草稿が山梨県立文学館に残されている。この二つは、「開化の殺人」とは設定やストーリーが根本的に異なるのだが、「開化の殺人」と関連があると見なされてきた。『新小説』発表の「未定稿」では、探偵の名が「本多」、被害者が「有川」となっているが、草稿では探偵の名が「本多」、被害者が「満村」となっており、草稿は「未定稿」に近い部分と「開化の殺人」に近い部分の両方を持っているからである。最初に書いたのが草稿で、そこから大幅に構想を変更して『中央公論』に「開化の殺人」を発表した後、従来の草稿の構想を生かしつつ改稿したのが『新小説』発表の「未定稿」なのではないかと推測されてきたわけである。

今回の「開化の殺人」完成原稿の公開は、この点についてより有力な根拠を示すものでもある。芥川の愛用していた松屋製の原稿用紙は、ほぼ同じような罫線であっても、ときどき微妙に版面が変化しており、それによって原稿が書かれた時期を推定することが可能である。山梨県立文学

館所蔵の草稿の用紙の罫線は、完成原稿の一枚目から十三枚目に用いられている原稿用紙の罫線と一致しており、近い時期にほぼ連続してそれらの原稿用紙が用いられたと考えられるのである。つまり、今回の完成原稿は、芥川が「探偵小説でなくなりさう」と書簡に書いていた大正七年六月十九日頃と推定される。

初出発表後、従来の草稿の構想を元に、「開化の殺人」とは独立した作品とするために被害者の名を「満村」から「有川」へと変更した「未定稿」が発表されることになるのだが、「開化の殺人」自体にも手が加えられている。『傀儡師』（新潮社、大正八年一月）収録時には、冒頭に、初出の本文全体を、「最近予が本多子爵（仮名）から借覧する事を得た、故ドクトル・北畠義一郎（仮名）の遺書」として紹介する文章が置かれ、それにあわせて作品の末尾も変更されている。探偵小説らしい探偵小説「未定稿」が当初の構想から一つの作品として切り出されてゆくのと並行して、「開化の殺人」の方もまた、粹小説としての結構が整えられていくことになるのである。

今回の完成原稿はこうした流れの中に位置付けられるわけだが、その内容から具体的にはどのようなことが分かる

か、いくつか紹介しておきたい。

最初に注目したいのは、事件の中核をなす殺人の口口が、実はそれを告白する北島の文章を書き始めた段階では決まっておらず、後から決まったらしいという点である。犯行の口口が明かされるのは、完成原稿二十五枚目にある、「満村の血色宜しからざる由を解き、これに所持の丸薬の服用を勧誘したる、一個壮年のドクトルありし」というシーンである。つまり、北島はドクトルとしての信用を生かして満村を毒殺したことになる。しかし完成原稿の九枚目を見ると、主人公の渡英の目的は最初は「法律の学」を学ぶことと書かれており、あとから「法律医学」と改められ、「法律」も消されて「家業たる医学」となっている。芥川は、まさにここを書きながら北島の職業がドクトルであることを決めたのである。ということはもちろん、ここではまだ、その後のドクトルという立場を利用した毒殺というプロットも固まっていなかったことになる。

改めて確認しておけば、本作は北島の手記の形式をとっており、北島は書かれる出来事を全て知った上で手記を書いていることになっている。「呪ふ可き秘密を告白し、以て卿等の前に予が醜悪なる心事を曝露せんとす」という予告めいた書き方が本作の大きな特徴である。にもかかわら

ず、その冒頭を書きながら、芥川は北島にどのような犯罪を告白させるのか、決めていなかったのである。

冒頭から少しずつ本文に示されてゆく細かい情報が犯罪事件の真相と緊密に結びついており、次第にそれが明かされていくというのは、探偵小説の一つの典型であろう。執筆の経緯からも、当初芥川がそのような作品の執筆を試みていたことは分かる。先に紹介した「開化の殺人」草稿では、日常的な些事についても細部の情報から見事に推理を組み立ててゆく探偵の姿が描かれていた。この草稿では、中心となる事件はついに描かれず終わっているものの、作品の細部が事件解明に結びついていくタイプの探偵小説が構想されていたことは明らかである。しかし『中央公論』に発表されることになる「開化の殺人」では、芥川は犯行の具体的な真相さえ決めずに書き始めていたのである。だとすれば、果たして芥川は「開化の殺人」をどのような探偵小説として書こうとしていたのだろうか。

芥川が、随所で書いては消し、何度も何度も推敲を重ねているのは、時間を示す数字である。たとえば七枚目を見ると、「予」が十六才のときの明子の年齢も、七才、十二才、十才と繰り返し推敲している。また四枚目では、舞台となる手記執筆より三年前という時間を、明治十二年とし、十

六年や十三年と書き換えたのちに十二年に戻し、結局ここでは具体的な数字を書くのをやめている。ここから分かるのは、そもそも芥川は、書いていく前に出来事の推移を時間軸に位置付けた上で叙述するという手順を踏んでいないということである。時間を示す数字は、その場その場で調整され、辻褄が合わされる。しかし結局、細かい辻褄合わせは放棄され、後半では日記の引用でさえ「十月×日」といった曖昧な日付になってゆく。

その中で唯一、具体的に示され、積極的に意味を担わされていた形跡のある数字がある。「六月十二日」という日付がそれである。この数字は、発表された形に見えるよりも、当初重要なものとして書かれ、どこかの段階で削除されたらしい。

四枚目の十行目から五枚目の二行目にかけて、墨書によって大規模に削除された形跡があるが、完成原稿をよく見ると、削除はこの三行に留まらないものであったことが分かる。四枚目の最後は「予が既」で終わっているが、五枚目は「か。予は是に答ふる能はず。」で始まっており、文章が繋がっていない。このことは、当初、四枚目と五枚目の間に原稿用紙一枚以上の内容が書かれていたが、四枚目から五枚目にかけての墨書による削除の際に破棄されたこ

とを意味する。そしてその四枚目の十行目に、墨で消された文字として見えるのが「三年以前」の「六月十二日」なのである。

この削除された日付を、作品のこの後の展開と照らし合わせてみると、興味深いことが分かる。「六月十二日」という日付は、この後に書かれることになる二年前の満村恭平殺害の日付であり、また一年前、「予がふと予の殺人の動機に想到するや、予は殆婦趣を失ひたるかの感に打たれたり」と日記に記した日付でもある。北畠は殺人のちようど一年後の「六月十二日」に、自らの犯した殺人が、それまで思っていたような正義のためではなく、嫉妬と私利の為だったのではないかという疑いを自覚し、それを契機に自殺へ向かってゆくことになる。二年前と一年前、いずれも作中で転機となる、最も重要な日付であると言える。そして、これらが一年前、二年前であるのに対し、削除された「六月十二日」はさらにその前の、三年前の「六月十二日」なのである。三年前の「六月十二日」の出来事として、一体何が書かれていたのだろうか。

もちろん、三年前の「六月十二日」についての記述が芥川によって削除されたタイミングは不明なので、削除された「六月十二日」の意味を、残されている二つの「六月十

二日」と同じ物語世界の内容として単純に比較することに
は慎重になる必要があるだろう。しかし、最終的に最も重
要な日付となる作品後半の要素が、執筆時には一度序盤に
おいて書かれていたという事実は、やはり興味深い事実で
ある。何を秘密とし、何を先に提示するかによって質その
ものが大きく変わるのが探偵小説というジャンルだという
ことを考えればなおさらである。

大胆に推測するならば、本作は、当初「六月十二日」と
いう日付自体が意味の空白として提示され、それが解かれ
てゆくという構成によって探偵小説として成立していたの
が、何らかの理由で大きく変更され、当初の構想が放棄さ
れた、ということになるのか。その際「六月十二日」とい
う日付が持つ重要性は、おそらく出来事のレベルの緊密な
推理を成り立たせることよりも、その日付に手記の書き手
が与える象徴的な意味にこそあったのだろう。芥川が四枚
目を書いているときから、本作は時間や出来事の整合性が
鍵となるタイプの探偵小説としてではなく、専ら手記の書
き手の心理の空白を謎として提示するタイプの作品として
構想されていたようなのである。そしてその構想は、この
大規模削除によって当初の予定からは変更されつつも、初
出の形として結実することになる。

そしてもう一つ、書き手の心理を提示する枠組みに注意
して完成原稿を見直してみれば、注目すべき点として、キ
リスト教のモチーフが本作に一貫して関わっていたことが
浮かび上がってくる。

本作は冒頭で述べられる通り、「秘密を告白」するという
形式に基づいてなされるが、遺書を読んだ本多子爵と夫人
の反応についての北畠の推測の中で「望外の不幸なり」と
語られるのは彼らが「憐憫の情を動す」という事態である。
罪の「告白」やその罪に対する「憐憫」という枠組はいか
にもキリスト教的なものであり、罪の告白を始めるにあた
って北畠自身「予が数年来失却したる我耶蘇基督に祈る。
願くば予に力を与へ給へ」と記すように、この遺書は友人
への告白であると同時に、半分は神へ宛てられたものでも
ある。

作中、キリスト教は北畠にとって三通りの意味を持つこ
とになる。出来事の順序から言うと、はじめは明子の結婚
を聞いたときに自殺を思いとどまらせるものとして、二つ
目は明子への愛を穏やかな「肉親的感情」へ変化させるも
のとして。しかしその信仰は、完成原稿十六枚目の満村へ
の殺意を抱く場面で「予は最早、この残酷にして奸黠なる
神の悪戯に堪ふる能はず。誰か善くその妻と妹とを強人の

為に陵辱せられ、しかも猶天を仰いで神の御名を称ふ可きものあらむ。予は今度断じて神に依らず、予自身の手を以て、予が妹明子をこの色鬼の手より救助す可し」として捨てられる。そこで捨てられた信仰が、この遺書を書くにあたって、「願くば予に力を与へ給へ」として復活するのである。

本作においてキリスト教は、書かれる対象の水準における北島の信仰として登場するだけではなく、手記の執筆や、手記の宛先である本多夫妻との関係をどのように書くかという水準に大きく関わるものである。その点について完成原稿の最も興味深い点は、初出時に誤植されてしまった一つの漢字である。遺書執筆の理由を最後に述べる三十九枚目の五行目には「以て卿等の前に聊自ら潔せん」と欲する」とある。これは初出本文では「以て卿等の為に」となっており、一文の中で「為に」が重複して表現として不自然であるが、芥川の「前」という字が「為」という字と似ていることよって誤植されてしまった結果である。完成原稿一枚目にも「卿等の前に」という表現があり、芥川はこのフレーズを作品冒頭と結末で呼応させていたのである。この誤植は、ついに修正されることなく全集でも「為」とされているが、ここが本来「神の前に」を變形させた表

現であったことは重要である。芥川は晩年「古人は神の前に懺悔した。今人は社会の前に懺悔している」と、神の前の懺悔が、神ならぬ存在への懺悔へとスライドする事態について述べているが、そのモチーフは「開化の殺人」のものであったのだ。

このことと関連して、作品の結末近い部分、完成原稿の三十九枚目の九行目の修正も注意されよう。ここでははじめ「卿等の侮蔑と憐憫とを」と書かれたのが「卿等の憎悪を憐憫とを」と訂正されている。「侮蔑」というキリスト教に馴染まない言葉が、「憎悪」するような敵をも愛し「憐憫」をかける、といったキリスト教的な枠組みに合う言葉に修正されていると見られるのである。また、「卿等が常に忠実なる僕、北島義一郎」という手記末尾の署名もまた、神の「忠実なる僕」という、キリスト教における表現が本多夫妻に置き換えられたものであることが見えてくる。

本作における探偵小説としての構想は、様々な形で試みられ、切り捨てられながら、最終的にはこのようにキリスト教を語りの枠組みに取り込む試みと交差しつつ結実した。そのことが、完成原稿からは明確に浮かび上がってくる。

しかし、探偵小説として導入が試みられたさまざまな可

能性の多くは切り捨てられていった。それらのありえた可能性への執着が、『新小説』の「未定稿」のような作品を引き続き芥川に執筆させることになったのだろう。

芥川は生涯を通じてキリスト教を扱った作品を多く執筆している。キリシタンものと通称される作品群である。この時期までの芥川のキリシタンものは、「尾形了齋覚え書」(『新潮』大正六年一月)、「さまよへる猶太人」(『新潮』大正六年六月)といった、棄教者や背教者の救済を扱うものが目立つ。また「開化の殺人」の二ヶ月後に発表された「奉教人の死」(『三田文学』大正七年九月)も、教会を追放された者の物語であった。その後、「きりしとほろ上人伝」(『新小説』大正八年三月)から、キリストの教えを自分に引きつけて信仰する(「神聖な愚人」)のモチーフが繰り返し描かれるようになる。「開化の殺人」が発表されるのはまさにその過渡期でもある。

「開化の殺人」は、一度棄教した者が信仰を復活させる筋ではあるが、それまでの作品のように、棄教の問題自体を中心に据えたものではない。北畠にとってキリスト教は、それまで信仰を捨てていたにもかかわらず手記執筆にあたって「予が数年来失却したる我耶蘇基督に祈る。願くば予に力を与へ給へ」と述べるような、可変的な枠組みとして

任意に力を借り得るものとなっている。ここではキリスト教は、語られる対象から、語りの枠組みの側に大きく位置を変えているのである。

「開化の殺人」では、この枠組みこそが北畠の「利己主義」をめぐる認識と否認の振幅の提示を可能にしているのであり、一人称告白体の奥行きを作っている。ここには、これ以前ともこれ以後ともまた異なる、キリシタンもののもう一つの方向性が示されていたのではなからうか。

そして原稿から浮かび上がってくるのは、それが「探偵小説」としての揺らぎの中から生まれてきたということである。拘束と斥力とを同時に芥川に与えた探偵小説というジャンルとキリシタンものの不定形な可能性が化学反応を起こし、その結果誕生したのが「開化の殺人」である。その可能性は、この完成原稿の細部にこそ豊饒に残されている。

最後になったが、今回こうして重要な原稿を紹介できることになったのは、所蔵者である秀明大学学長、川島幸希氏のご好意によるものである。川島氏には改めて感謝を申し上げます。

【注】

- (1) 角田忠藏編纂・解説『芥川龍之介自筆未定稿図譜』大門出版美術出版部、昭和四十六年九月
- (2) 松岡讓宛書簡、大正六年十一月二十四日
- (3) 薄田泣菫宛書簡、大正六年十二月八日
- (4) 松岡讓宛書簡、大正七年六月十九日
- (5) 『芥川龍之介資料集』山梨県立文学館、平成五年十一月
- (6) 「侏儒の言葉（遺稿）」『文藝春秋』昭和二年十月